≪ポーツマス条約の経過≫

明治日本は李鴻章が策謀した三国干渉により遼東半島（中国遼寧省の南部に位置する中国第二の面積をもつ半島で、大連などの都市がある）を放棄せざるを得ない挫折を味わった。また、国民全体も屈辱感に打ちひしがれ、朝鮮がロシアの傀儡政権化したことに大きな危機感を覚えた。その結果、国民のロシアに対する敵意は燃え上がり、軍部が計画するロシアとの戦いに備える陸・海軍のグランドデザイン実現の為、強烈な団結協力の体勢が出来上がった。

＊ 明治３７年８月２２日　第一次日韓協約締結

韓国が清やロシアの要人を入れたことが国内紛争の火種となり、結果、これが原因でこじれ、日露戦争に至った。その反省から、日露戦争の日本勝利が確実に見えるや、今度は日本政府の推薦者を韓国政府の財政・外交の顧問に任命する為の協約である（明治３０年朝鮮は国号を大韓帝国と改めている）。

＊ 明治３７年９月５日　日露講和条約（ポーツマス条約）締結

日露戦争終結。アジア黄色人種は白人の最強国ロシアに勝った。日本は国の存亡を賭け、しかも朝鮮の独立を維持させ、ひいてはアジアの存続の為に闘った。日本将兵の戦死者１９万人、戦費１５億円であった。結果的には満州・朝鮮からロシアを追い出し、清と朝鮮に国土を取り戻させた。しかし、ロシアからは賠償金は取れず、清・朝から一言の礼もなく、その上に戦場借用金１５０万円（ロシアは２００ルーブル）を支払った。皮肉にも清国はロシアと軍事密約を結んでおり（世界は知らない）、反日運動の嵐が吹き始めることになる。日本では、兵力は限界に達し、国力も疲弊しきっている現実を知らぬ国民はサハリンを割譲しただけで一銭も賠償金が取れない小村寿太郎の弱腰外交を不満として、明治３８年（１９０５年）９月５日　東京の日比谷公園で講和に反対する国民大会が開かれ、一部は暴徒化し、内務大臣官邸や警察署・交番など次々と焼打ちされた。

ポーツマス条約の詳細について（日本は疲弊しきっていた）

日本は５月の日本海海戦の歴史的勝利により、ロシア海軍を壊滅状態に追い込んだ。一方、日本陸軍の兵力補充は限界に達していたのに対し、ロシア陸軍は満州北部に健在で余力もあった。この現状の中で政府は早期講和を目指しており、日本海海戦から四日後の６月１日には早くも日本贔屓の米国大統領セオドア・ルーズベルトに斡旋を申し入れた。実はこの米国の斡旋による「早期講和」は、開戦時から日本が描いていたシナリオだった。この為ハーバード大学留学以来、ルーズベルトの親友で貴族議員の金子堅太郎を開戦直後に訪米させ、頻繁に接触させ、米国内で工作活動に余念がなかった。結果アメリカ国民の多くを味方につけた。実は奉天会戦を機に、セオドア・ルーズベルト大統領はロシアに講和を打診したのだが、ロシアはこれを拒否していた。

金子 堅太郎

しかし、バルチック艦隊の壊滅、国内の帝政打倒の為の「血の日曜日」事件と呼ばれる非武装の請願行進への発砲事件が重なり、ロシアも妥協。ロシア皇帝がドイツのヴィルヘルム二世の勧告を受け入れる形でルーズベルトが仲介し、平和交渉が始まった。
日本からは小村寿太郎外相と高平小五郎駐米公使、ロシアからはウイッテ元蔵相とローゼン駐米公使がそれぞれ全権大使として、アメリカの東部海岸の軍港ポーツマスで講和会議が開かれたのである。ロシア側にはまだ戦争を続ける意志があるとの情報もあり、講和の行方は厳しく、小村の肩に日本の運命は重くのしかかっていた。最後まで残った問題は、賠償金の支払いとサハリンの日本への割譲だった。サハリンは戦争末期に陸軍が攻め込み事実上支配していたが、ロシア側は割譲を拒否。賠償金支払いも拒否し、交渉は暗礁に乗り上げた。国民は「勝ったのに一銭も取れないとは、何事ぞ」と講和反対論が起き、暴動まで発生した。強気の小村でも妥協しなければならぬ程、日本は戦争で疲弊しきっていたのである。両国の固い姿勢にウイッテも小村もポーツマスを引き揚げ

る旨の電報を打ち、ウイッテはホテルの勘定も済ませ、９月５日発の汽船を予約していた。しかし急にロシア本国が賠償金は拒否するが、サハリンは南部割譲に応じるとの回答があり、小村もこれ以上の拒否は不可能として受け入れ、急転直下、講和が成立したのである。

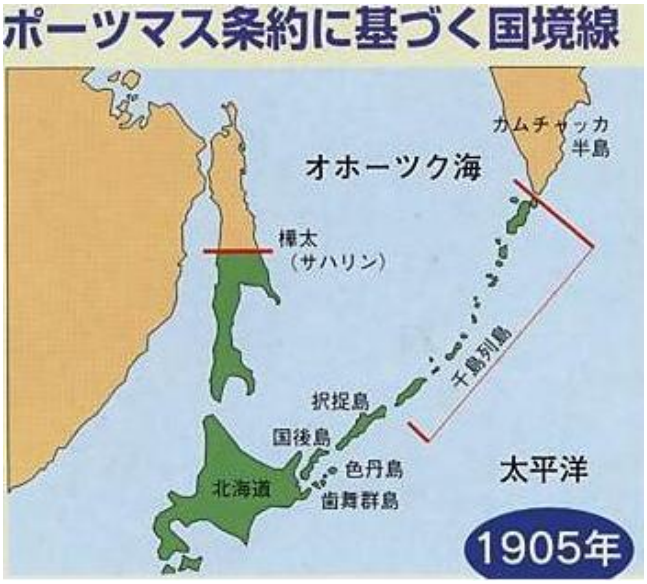
講和会議の様子

<u>条約の主な要点</u>

① 韓国における日本の政治、軍事、経済上の優位権の承認。且つ必要な場合の指導。

② 遼東半島租借権の日本への譲渡。ただし清朝政府の承認必要。

③ 北緯５０度以南のサハリンを日本に譲渡。



④ 沿海州における日本の漁業権供与の約諾。

⑤ ロシアが満州に敷設した東清鉄道南部支線の長春以南を日本に譲り渡す。

これにより韓国・満州はロシアの支配から逃れ、日本の独立と安全も一応守られた。アメリカは「支那の独立を毀損せざる範囲に於いて日本の特殊権益を容認」する立場を示した。こうして「日本の生命線」である満州を守ろうとする日本と、それを阻止する中華民国の衝突が激化し、満州国建国から日支事変、日米戦争へと発展して行くことになる。

当時の難局の時代「功成り名を遂げた」元老達は責任を取る役職を敬遠し、山県直径の陸軍官僚である５３歳の前陸軍大臣の桂太郎が総理大臣（首相）に指名された。

注）桂太郎

台湾総督（第 2 代）、陸軍大臣（第 5 代）、内務大臣（第 18 代）、文部大臣（第 23 代）、大蔵大臣（第 13 代）、貴族院議員、内大臣、外務大臣（第 17 代）などを歴任した。首相在任日数 2886 日はこれまでで最も長い。桂は「ニコポン宰相」と呼ばれた。桂がニコニコ笑って肩をポンと叩き、政治家や財界人を手懐けるのに巧みだったためと言われている。

この桂が外務大臣に抜擢したのが小村寿太郎である。宮崎県の旧飫肥（おび）藩出身、明治を代表する外交官陸奥宗光に見出され、駐米・駐ロシア・駐清各公使を務めた。彼は政治家としての力量は未知数だったが、「国粋主義者」と言われるほど愛国心が強く、体は小さいが度胸抜群だった。桂はこの危機の時代に、小村の強さに期待したのである。小村は桂の期待通り、日英同盟を成功させ、日露戦争を有利に導く

等、後の重光葵と共に日本の最も偉大な外交官と称せられる人物に成っていった。一国を背負って立つ彼の凄まじいまでの愛国心と気概は日本人が学ぶべき生き方であろう。

小村 寿太郎

〈奇跡を呼び込む決断と肚〉そして〈勝利の要締〉

日露戦争とは世界史を変えた、そして世界秩序を変えて行く起点となった。同盟国のイギリスでさえ「日本の勝利は白人の幸福ではない」と考えていた、とヨーロッパに滞在した孫文は証言している。世界最初の近代戦となった日露戦争は日本のみならず、その後のアジアを含め全世界の運命を大きく変えていった。次回からはその話になると思う。

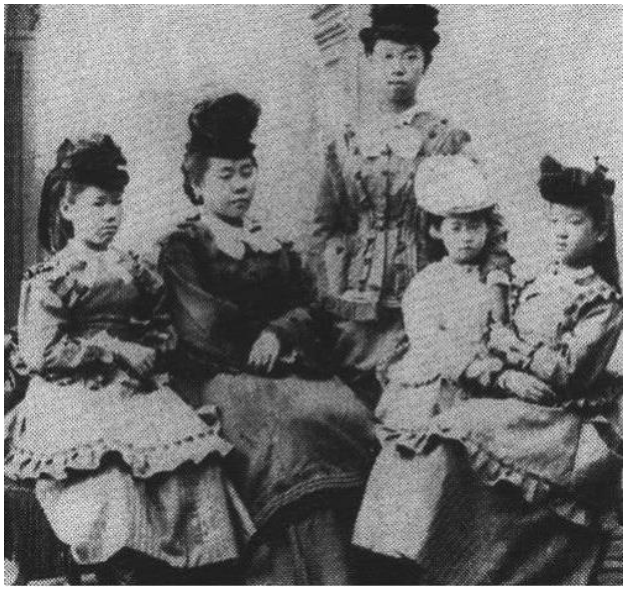
日露戦の勝利は陸海軍とも「奇跡」の勝利だと世界は評している。しかしながら日本はこの「奇跡」を呼び込むだけの要諦があった。私は、戦術面のみが注目されるが、勝利要諦の第一は、明治の人々は満州に関するロシアの動きから迫りくる国難を肌で感じ、この国難を「しっかり」認識し、何を為すべきかを政治家、官僚、軍人、国民の一人一人が現実的に早くから考え、又覚悟し、準備を怠らなかった事である。現在の我々が特に認識すべきは、明治人には領土的野心は全くなく、あく迄日本の独立と安全のためであり、その為には日本海をロシアに支配されない！！　この一点に挙国一致で当たったのである。

勝利要諦の第二は、当時のリーダーの多くが幕末から日清戦争に至るまで、数々の修羅場を潜り抜けた猛者の体験的リアリズムの思想の持主であったが故に、巨大な敵を前に日本人が「一致協力」のグランドデザインを描けた事である。

第三の要点は、超合理主義同志の上司と部下の人間関係が良好で、信頼で支え合っており、部下と上司の多彩な名コンビが生まれた。即ち部下に任せ切る上司の肚の太さ、それに答え上司と共に私利私欲を捨て国家の為全霊を傾けた故、全てに於いて決断が早かった。

第四の要点は、戦争の終着点を明確に見据えていた事である。

例えを述べれば、「主人が好きなのは一番が児玉さん、二番目が私、三番目がビーフステーキ」。大山捨松が夫「巌」の好きなものについてそう語る程、大山は児玉源太郎を信頼していた。



注）明治政府が米国へ派遣した留学女学生。右端が山川捨松（当時 12 歳）。捨松の左隣が後に津田塾大学を創立した津田梅子（当時 9 歳）。

一方児玉も「蝦蟇坊（がまぼう）－大山のあだ名－の下ならば喜んで」と降格人事を快諾し大山の部下となり、このコンビ誕生が日露戦争の行方を決めた。この日本型上司と部下の理想の姿と言うべき関係を結べたのは、何時でも責任を取り死ねる覚悟と肚を養っていたからである。武士の教育は覚悟・肚を養うためにある。

大山は西郷の従弟で、西郷の大きな影響を受けて成長し、ヨーロッパ正当の数理に徹したフランス砲兵の理論を学び、独自の工夫を凝らした弥介砲も開発している。西郷は細部も疎かにしない緻密な精神を持ちながら、外見は実に茫洋としたイメージが定着していたが、彼の凄味は「最後はいつでも命を投げ出す」と言う覚悟の深さから生じている。極めて身近な位置から西郷の後姿を追って来た大山は、西郷の示す理想的な指導者

像、即ち「命がけの覚悟」を茫洋とした「情」で包み隠す姿　―を自ら体現する事を心に誓い、その強い想いが、内に目から鼻に抜ける鋭さと実務的に高い能力を持ちながら、外見は茫洋とした雰囲気で周囲を包み込む後年の彼の姿勢を決定づけて行くのである。彼が西郷から得たものは郷中教育で得た「心肚（しんと）」と、指導者としての「徳」であろう。

一方児玉は長州の「用兵の妙、神の如し」と称賛された山田顕義（あきよし）により、函館五稜郭の戦いでの見事な指揮振りを認められ、指揮官訓練所の「兵学寮」に推挙され軍人としての生涯のスタートを切った。吉田松陰に入門。松陰に目をかけられ、大村益次郎に西洋兵学を学んだ山田らが脈々と伝えてきた「長州合理主義」は児玉に受け継がれた。児玉は同じ長州出身の「山県有朋」の「長州軍閥」の系譜を嫌い、日露戦争では「山県に如何に口を出させないかが、戦争の帰趨（きすう）が掛かっている」という悲壮な課題を抱える事になる。一方大山は藩閥にとらわれずに優秀な軍人を自分の庇護下に置き育てた。薩摩の川上操六だけでなく、長州出身の桂太郎らも分け隔てなく遇した大山を児玉は尊敬していた。彼等が軍制改革など辣腕をふるえたのは、山県に常に半歩譲って陸軍の融和に心を傾けた大山の庇護があればこそであった。「国家の大方針」では大山も児玉との想いは一致し、しかもプロセインの名参謀モルトケの衣鉢（いはつ）を継ぐメッケル（大山が招く）が非凡人、理想の天分に恵まれていると評された児玉とは、軍制をドイツ式に改革を断行した大山とは大局的視点が共通していた。「兵器の独立なくして、国の独立なし」の思想も大山と児玉は共有したことが、大山が児玉に全幅の信頼を寄せた背景であった。さらに言えばこの様に息の合った二人が、共に「肚」の据わった人間だったことも、日本が日清・日露を勝ち抜く秘密であり、要諦であろう。

日露戦は決して奇跡ではなく二人の物事の本質を見抜く慧眼（けいがん）と、人間としての質の高さ、日本陸軍の内実を磨き高めた両名の決断力・覚悟・肚が創り上げた功績の結果だったのである。次回は陸軍の各司令官、満州の地政学上の重要性、海軍の勝利の要諦について述べたいと思う。

平成２７年７月１４日

志雲会塾長　　有馬正能